

山里を支えた養蚕

●植物と人々の博物館

井村礼恵 (研究員)

加藤増夫 (館長) 黒澤友彦 (連携推進室長)

川上香 (研究員) 和家令佳 (研修生)

●アドバイザー

東京農工大学科学博物館



▲ 植物と人々の博物館にて

小菅の民具の 保存と継承のための活動

私たちは2006年より、小菅村教育委員会が30年ほど前に村内で収集した民具を文化財審議委員の皆様のご協力を得ながら、調査・整理を行っています。環境学習の視点からこの作業はとても有意義であると思っています。まず、民具の清掃から始め、村の方々から聞き取り調査を行い、データベースを作っていました。専門家に任せずに、多くの村人、学生、街人が一緒になって祖先の文化遺産を整理、展示することは、エコミュージアム日本村のコア博物館づくりの一番大切な仕事です。この作業の過程で、私たちは多くの伝統的知識を学びました。展示台や棚は国土緑化推進機構ほかの助成金によって、小菅産材を伐り出して、小菅村の大工、小林豊蔵さんが製作しました。基礎的なアイデアは大学院生が提案して、これをうまく大工さんが形にしてくださいました。常設展の初めは雑穀畑作文化に関わる展示でしたが、第2回は小菅村の主要な産業であった養蚕を取り上げました。

収集された民具の話を聞く中で、多くの高齢者の方が懐かしそうに、話をしてくださったのが、養蚕の話だったからです。昭和50年初めには村内でやっている家は1軒もなくなってしまった養蚕とは、山村の暮らしにとって、どんなものであったのでしょうか。



▲ 村民間の民具に関する情報交換



▲ 常設展示

蚕の道具 1

蚕の飼育は、湿度と温度の管理が重要だった。
家中一面に新聞紙を貼ったり、
春の寒い折には行燈に炭を入れ、温度を保ったという。

コノメ台 ヤトイ棚

コノメ台に、木製のコノメもしくは竹製のカゴを載せ、その上に、4尺ムシロ、サンザッシ（蚕座紙）、シリトリアミを敷いて、蚕の餌やりやシリトリなどの作業を行った。シリトリアミは、網目が細かいものから5mmのものまで、種類がいくつかあり、蚕の成長にあった網目のものが使われた。蚕は、作業以外の時にはコノメやカゴごとヤトイ棚に収納、飼育された。

ケゴの掃き立てには鷹の羽根が使われ、丁寧に扱われたようだ。



▲ ヤトイ棚



▲ コノメ (木製)



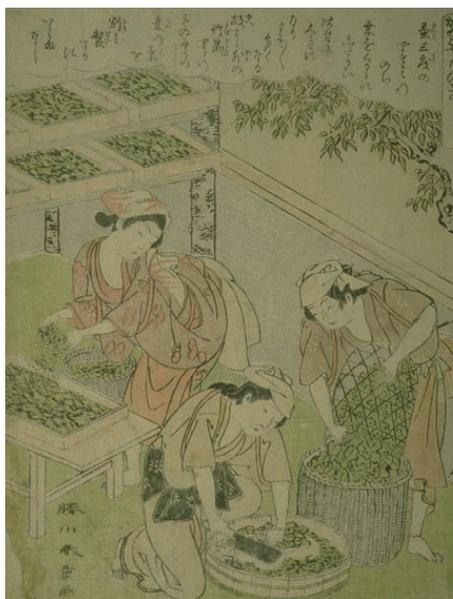
▲ カゴ (竹製)



▲ コノメ台



▲ シリトリアミ



▲ 「コノメ台」と「ヤトイ棚」の使用イメージ画
かゝるこやしなひ草 第三
「給桑 (4令)」 勝川春章 (北尾重政) 1786
東京農工大学科学博物館蔵

蚕ぼん

「ヒキ」った蚕を「マブシ」に移動する際に、落として傷めないために使用した。「オコボン」とも呼ばれ、トチノキで作られることが多かったようだ。



蚕の道具 2

乾燥蔵

70年ほど前に作られたもの。扉の中には生繭を載せる棚が入るようにになっている。棚の下には、炭を入れ、繭を乾かしたそう。出荷する繭から成虫が出てきて繭を傷めてしまわないように、サナギを殺すための蔵である。クリの葉と一緒に載せ、乾き具合を見たという。扉には、立派な錠前が付いており、当時の繭がとても価値あるものであったことを物語っている。



▲ 民家の脇に建てられた乾燥蔵



ハギ

ワラマブシ以前は、「ハギ」と呼ばれるものに、繭を作らせたそう。これは、ナラ、ソロ、ツガの枝、ツツジの株のほけたものを切ってきて、日陰で乾かし、まとめて結わえたものである。

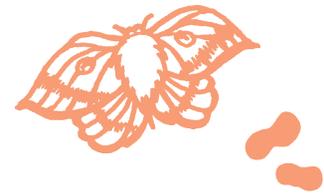
その年の養蚕が終了すると、寒くなる前に、「ハギ焼き」をして、翌年の準備をした。ハギを火でチリチリと燃し、川にふせこんで、足で踏み、毛羽を取り除ききれいにする。そうすることで繭のつきがよくなり良質の繭がとれる。2～3年は繰り返し使い、養蚕で使用後は、焚きつけに使ったそう。



▲ 「ハギ」の使用イメージ画
かろこまゆをつくる之図
「まぶし、繭」 五亀亭貞房 1816
東京農工大学科学博物館蔵



▲ コノメに合わせて作られた棚



▲ ハギ



▲ ワラマブシ



▲ 回転マブシ (木枠)



▲ 回転マブシ (鉄枠)

昔

近代

蚕の飼育

春蚕（ハルゴ）・夏蚕（ナツゴ）・秋蚕（アキゴ）
・晩秋（バンシュウ）・晩晩秋（バンバンシュウ）と
年4～5回も養蚕をしていた。

卵の話

ある人からは、「多い年は1年に160貫の繭をとっていた」という話を聞いた。年間を通じて、春60g、夏20g、晩秋20g、晩晩秋10gというように、時期によって、量を変えて、多い時で4回やったこともあったそうだ。10gの卵からは、良質な繭の場合で12貫以上とれたという。また、小菅村では高度経済成長期になると「お蚕先生」と呼ばれた指導員のもと、1～2齢の稚蚕期の飼育を共同で行うこともあったそうだ。



▲「飛白（かすり）」という品種の「一化性」の蚕種紙。表紙にはびっしりと卵がついており、裏には「群馬県蚕種同業組合」の標章がついている。「飛白」は、蚕の成虫の斑紋を表し、「一化性」とは、1年1世代を示し、幼虫が丈夫で休眠が長く、冬を越さないと産卵をしない。日本産は二化性が主で、ヨーロッパ系の二化性が好まれ、流通したそうだ。

桑の話

桑は畑を分けし、各時期に適した状態になるように工夫した手入れがなされていた。例えば、標高が高いところの桑は、春には葉の厚みが薄くやわらかいため、夏まで与えなかった。年寄り衆は、桑の葉が「12っぱ」にほけていると、「今年は蚕に良い桑だ」と言ったものだったという話も伝えられている。また、桑の葉は濡れているものは与えられないため、露に濡れない時間帯に桑摘みに行ったり、桑の葉を乾かすように「手動扇風機」を使った家もあったそうだ。



▲手動扇風機



▲ひと枝に葉が12枚ついていると、蚕の餌に最適



◀桑採りには女性、子どもも参加し大きなカゴを背負った。少しでも多くの葉を背負えるように、カゴの上にさらにカゴを重ねてふたをした。桑が大量に必要な時には、他の人から買うこともあったそうだ。



▲桑畑の様子（平成21年2月 神奈川）

繭の利用

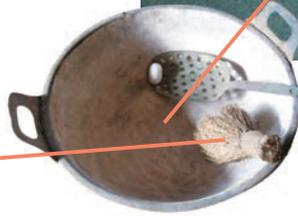
モロコシの穂やサナギの利用など循環していた生活の様子。

糸取り

足踏み糸取りは、「フミド」と呼ばれていた。生繭は専用の鍋で煮られ、糸が取られた。この鍋のふちは糸がひっかかりにくいようにホーローでできており、「蚕の鍋は中が真っ白い鍋だった」とお年寄りは口を揃えて、説明してくれた。鍋の中で糸は箸でまとめられ、1/3だけ鍋から出し、ふしがなくなるよう手繰られた。鍋の中に残り残った糸は、アカモロのカラ(穂)で作った「ホウキ」で拾われた。



▲アカモロ (モロコシ)



サナギ

《おやつ》子どもがおやつにしたこともあった。風呂たきの火であぶって食べた。油っぽく、おいしかったそうだ。《ワックス》木綿の手ぬぐいで袋を作って、サナギを入れ、家の床やおび戸を拭くと、よく黒光りするワックスになり、とてもよかったそうだ。《餌》鯉を飼っている人は餌にしたり、ヤマメの釣り餌にするとよく釣れたそうだ。



▲繭の中のサナギの様子

小菅の養蚕用語ミニ辞典

【ケゴ】

蚕の幼虫のこと

【ヤグラ】

桑を与えた後片付けのこと。片付け作業は、とても時間がかかった。

【クワデ】

蚕が食べ残した桑のクシ部分のことで、太い部分は薪にし、薪にできない細かいものは「押し切り」で切って、畑のシバにした。

【シリトリ】

蚕のフンの片付けのこと

【コクソ】

蚕のフンのこと。熱が出て、発酵する前に、早めに片付けた。モロコシや野菜の畑に追肥として使った。

【トマル】

脱皮すること。ケゴからトマルことを、「一眠、二眠」と数える。

【ヤトウ】

マブシに入れること。蚕は昼間の方が活発なため、朝にたけると糸の長さが長い繭がとれるそうだ。そのため、朝から作業をした。マブシの中では「ハギ」を使用すると糸が長くとれたように思うという人もいた。

【ヒキル】

体の中からフンや尿を出し、透き通ってくることがいい、そうなるともう桑を食べなくなる。「ヒキ」ってきて、マブシに入れると2晩位観察や世話をしないとよい繭が出来ない。

養蚕×信仰 1

蚕は1か月で収入になるが、子どもは20年たたないと収入にならないことから、「蚕はオシラ様で、子どもは餓鬼だ」という言葉もあるほど、尊ばれた。

オスガタの札

小永田地区の浅間様（5月5日）のお祭りでは、「蚕安全守」「家内安全守」「安産守」の3つの札が販売されている。「蚕安全守」は「オスガタのお札」と呼ばれ、蚕の神様である。この札と一緒にお願いをした繭が渡される。受け取った人は、翌年とれた新しい繭を前年に受け取った繭の数よりも多く返すという決まりだったそうだ。現在は養蚕をやっている家がないため、購入する人はいなくなってしまった。



▲右が「オスガタの札」

二つの石碑

かつて、ヒョウによって、桑の若芽が駄目になったために蚕が大量に病気になる死んでしまったことがあり、その時の蚕を祀った碑が村内に2つある。小永田地区では蚕の体が黒くなり溶けて死んでしまったと言い伝えられており、「蚕影山大神」と書かれた碑は、「養蚕の地蔵」と呼ばれている。長作地区では、昭和10年頃に部落の2～3人が榛名山に蚕供養の「講」に行き、オヒマチをし、御鷹神社に繭の形と「蠶天霊」の文字を彫りこんだ碑を建て、「お蚕神さま」と呼んでいる。



小永田地区：「養蚕の地蔵」



長作地区：「お蚕神さま」

ヒョウ祭り

長作地区では、かつて3月4日に「ヒョウ祭り」をしていたそうだ。部落中でおかゆを食べ、ヒョウが降らないようにと祈った。お粥食いとも言われ、子どもが中心となって行う行事で、60年ほど前まで行われていたという。

初午 二の午

2月に行われる初午、二の午は、一般にはお稲荷さんの祭りとされるが、村ではかつて蚕の祭りとしてオヒマチをしていたそうだ。部落中の人で、ポタモチを食べて、養蚕がうまくいくことを祈ったという。

養蚕×信仰 2

小正月の ダンゴバラ

1月13日の小正月には、ダンゴバラを飾る。

現在では、ダンゴバラには米粉で丸型に作った団子（白色の他、食紅で赤や緑色に着色したもの）とミカンを飾り、地区ごとに団子焼きをして、健康を祈っている。この行事は、本来、養蚕がうまくいきますようにと願う行事であった。

<かつての話>

ダンゴバラには、「ヤマッコゾウ」「ヤマグワ」と呼ばれるヤマボウシを使っていたそうだ。2～3年前からダンゴバラ用に剪定をし始め、1m50cm位の高さに整えていた。その木を正月2日の仕事始めの日に伐りに行き、石臼に差して飾ったそうだ。

ダンゴバラの飾りは、黄色と白色の団子、ミカン、縁起物、丸い紅白の米菓子だったそうだ。小正月の神様を呼ぶ目印として、青いもの（1m～1m20cm位のツゲ）を添えることもあった。

縁起物は、年末に上野原西原地区の「だるまや」さんが売りに来ていた。鯛やおかめ、ダルマなどがついているもので、とても高価だったが、養蚕をしていた人たちは購入し、飾ったそうだ。

団子は「繭玉」と呼ばれ、繭型や丸型、鳥の形などに作られた。黄色の団子は甲州系トウモロコシ（ムカシモロコシ）の粉で作られ、山蚕をの黄色い繭を表しており、白い団子は「ウマノハ」と呼ばれる白いトウモロコシの粉で作られ、養蚕の白い繭を表していたそうだ。

ダンゴバラの姿形を見て、「今年は蚕がうまくいく」などと言ったものだったそうだ。



▲ だるまや



▲ 米菓子



▲ 縁起物

ウマノハについて

一粒の形が馬の歯に似ている房の大きい白いトウモロコシ。収量が多いため、凶行作物として栽培されていた。普段は茹でて食べる事が多く、粉にした場合は小麦と混ぜて焼き餅や中に小豆を入れてお饅頭にして食べられていた。昭和40年頃には村内でも栽培がされなくなったという。



織物 1

村でうち織をしていたことを80代以上の人達しか知らなかった。それは、しだいに、生糸まで加工しなくなり、繭のまま出荷するようになったためだった。

うち織

家族のために反物や着物を織ることを「うち織」と言う。うち織には、繭が薄くなってしまった「ひとっかわ」や、虫がふたつ入っている「オオマユ」、糞などで汚れた「サビついた繭」、繭のアジ(ケバ)部分の「くず繭」などの商品にならない糸が使われることが多かった。村内では、これらの糸を買い取って、うち織を作り販売する人もいたそうだ。

ダテマキもうち織で作られた。オオマユのフシ部分や、「シケ」と呼ばれる楊枝位の太さの部分などの出荷できないものを紡いで織られた。この部分は太く強いので、風揚げの糸にも使われたそうだ。



◀ 正絹の三ッ紋

大正2年生まれのおばあさんが17歳で嫁に行く際に作ってもらったという生家の紋がついた着物。



◀ 縞織りの着物

昭和2年生まれのおばあさんは、19歳から機織りを始めた。この着物は、自分のために、糸を染めてから織ったもの。農閑期の冬には、手織りで反物を作ったそうだ。「ケケル」と言う織るための準備は大変で時間がかかるが、織り始めれば1日で1枚の着物を織ることができたそうだ。



▲ ダテマキ



▲ 出荷用の糸



▲ うち織用の糸

体験

「繭からの糸づくり体験ワークショップ」を東京農工大学科学博物館のご協力により、開催します。(平成21年多摩源流まつり期間中)



織物 2

● 小菅にある織物の民具たち



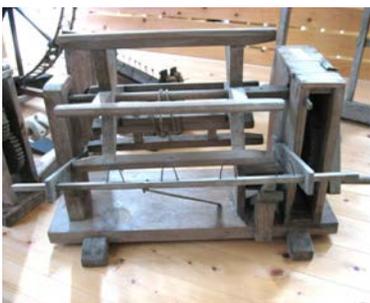
▲ アゲワク (調査中)



▲ アゲワク



▲ 糸車



▲ 座グリ



▲ 機織機



▲ コワク



▲ ヒ

参考文献

知久正三郎編 (平成7年)『うらが村小菅のかきつけ』 松木芳治
守重保作編 (昭和58年)『小菅村郷土小誌』 小菅村

協力者

東京農工大学科学博物館

小菅村役場、小菅村教育委員会、小菅村文化財審議委員、小菅村高齢者学級
青柳一男さん / 奥秋忠俊さんご夫妻 / 奥秋都志子さん / 奥秋三雄さん
木下純子さん / 古菅立身さん / 松木常男さん / 松木長子さん / 松木文子さん
松木学さん / 松木勇治さん / 古家大助さんご一家 / 細川百枝さん / 守重市平さん
守重祐雄さんご夫妻 / 守重長雄さん / 守重ヌイ子さん / 守重伴勇さんご夫妻
守重元恵さん / 守重洋作さんご一家 / 守屋あき子さん
その他 小菅村の皆さん

池上貴之 / 本間由佳